

発行

千葉県立中央博物館
房総の山のフィールド・ミュージアム

連絡先

〒260-8682
千葉市中央区青葉町955-2
TEL:043-265-3111

[http://www.chiba-muse.or.jp/
NATURAL/special/yama/](http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/)

2021(令和3)年3月発行

2021・春
72

特集

トウキョウサンショウウオ



繁殖のため水場に集まったトウキョウサンショウウオ (尾崎煙雄 撮影)

早春の寒さの中、房総丘陵には多くの動植物が息をひそめて本格的な春の訪れを待っています。そんな中、一足先に動き出す生きものもいます。いえ、正確にはこの時期でなければ見られない生きもの・・・それがトウキョウサンショウウオです。

トウキョウサンショウウオは主に関東地方の低山地に生息する両生類の一種です。本種の成体は普段、林床に積もった落ち葉や倒木、岩の下など、人目に付かない場所で生活しています(次頁図①)。一月から三月頃になると山林やその周辺の水溜まりで繁殖します。この繁殖期だけはいる場所が絞られるので見つけることができるというわけです。

残念ながら今年の冬は彼らに会うために気軽に出かけようという状況ではなくなってしまうかもしれません。そこで本号では、どうせ外出できないのなら普段だつてできないような旅行、時間旅行をしたつもりになってみよう、そんな趣向を考えてみました。早春の生きものであるトウキョウサンショウウオを通して、房総丘陵の過去数万年の歴史に思いを巡らせてみましょう。

(栗田隆気)

房総の山のフィールド・ミュージアムとは

房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業の一環です。観察会を開催したり、旧君津市立三島小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点として、地域の方々のご協力をいただきながら、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

『教室博日記』の紹介

房総の山のフィールド・ミュージアムのウェブサイトには『教室博日記』というコーナーがあります。学芸員が房総の山を歩き回って見つけた生き物や地形・地質や歴史・民俗などを写真と文章で紹介しています。毎月、数本から十数本の記事を追加していますので、ぜひ、のぞいてみてください。



教室博日記のQRコード

QRコードから「房総の山のフィールド・ミュージアム」のサイトに入り、「更新情報」にある「教室博日記」をクリックすると目次ページ(画像)が開きます。あるいは、http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/news/news_index.htm を開いてください。

(尾崎煙雄)

教室博日記の目次ページ



連載

小櫃川流域の生きもの

ヤマガラ ~ドングリの争奪戦?~

下流域の公園、葉を落とした桜並木で、「ピー、ジュージュー」と小鳥の鳴き声。「シジューカラ?」と見ていると「わき腹が赤茶色。ヤマガラ!ここでは初めて」と驚いた。ヤマガラはサクラの枝からイチョウの枝へと素早く飛び、真下から、懸命にシャッターを切る。「くちばしにドングリ!」。形からスダジイのドングリ。そこに、別のヤマガラが追いかけてきた。くちばしにドングリをくわえたまま、枝から枝へと飛び移り、あっという間に姿を消した。ヤマガラのドングリ争奪戦?と思った。ドングリはこの小鳥の好物で、冬場の食料確保のため樹皮の隙間や地面の中に貯えるほど重要な食べ物。かつて、ヤマガラがドングリを枝に両脚で抑えて、くちばしで激しく突いて割っていた。それを見て、子供の頃、お祭りで見たヤマガラの「おみくじ引きの芸」を思い出した。この芸は、籠から出たヤマガラが1円玉をくわえ、小さなお宮の寶銭箱に落とし、くちばしで垂れ下がったひもを引いて鈴を鳴らす。そして、お宮の扉を開き、おみくじをくわえてきて、止まり木で、脚で押さえて封を切



写真1: ドングリをくわえたヤマガラ
2020.11.16 木更津市



写真2: 秋の下流域の公園
2020.11.16 木更津市

るといふ込み入ったものである。しかし、今では、この小鳥を知らない人が増え、その芸も廃れてしまった。

公園では、イチョウの黄葉が青空に映え、小さな自転車を懸命に踏む幼子の顔がほほ笑む。しかし、ヤマガラに気づいている人はいないようだ。ヤマガラは町中では見かけないが、流域の台地などの雑木林に一年中いて、秋から冬には平地の公園にもやってくる。一目見ればヤマガラの暖かみのある色合い、俊敏で賢い姿に引き付けられると思う。

参考文献 小山幸子1999『ヤマガラの芸』法政大学出版局
財団法人千葉県史料研究財団2002『千葉県の自然誌本編6』
(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

しいむじなの由来



房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

編集後記

水期、間水期といった気候変動による海岸線の変化が、生物の分布へ及ぼす影響というのは大変興味深いテーマです。現在は大きく見ると水期に向かっていますが、その一方で「地球温暖化」という問題もあります。この先、人類も含めた「生きもの」の生息環境はどうなっていくのでしょうか。

さて、今年度最後の号になりました。今回は生態・環境研究部の若手職員に特集やコラムを書いてもらいました。いつものような博物館活動ができなかった一年でしたが、来年度は、今まで貯えてきたものが実る年であるよう願っています。(八木令子)



写真1 カワラヒワの群れ



写真2 擬態するタシギ



写真3 ハシボソガラスのモビングを受けるノスリ



写真4 田んぼの一画に残されたヨシ原



写真5 オギ群落で見つかったカヤネズミの巣

「房総丘陵やその裾野は「長狭米」や「いすみ米」などのブランド米に代表される米産地で、各地に田園風景が広がっています。田植えが終わって青々とした田んぼや、稲刈りを控えた黄金色の田んぼは、とても色鮮やかです。それに比べて、冬の田んぼはどうでしょう。枯れた稲や泥土の茶色が目立ち、なんだか寒々とした風景に感じます。しかし、そんな冬の田んぼは、実は多くの鳥たちでにぎわうホッと環境なのです。

日短くなり、冬が訪れた頃。すっかりその年の役目を終えた田んぼには、二番種や雑草の種子、まだ冬眠しない昆虫、ミミズなどを目当てに多くの鳥が集まります。遠い北国から飛来したツグミやタヒバリなどの冬鳥のほか、ムクドリやカワラヒワも大きな群れでやってきます(写真1)。冬の田んぼは、これらの多様な鳥類の、たくさんの命を支える重要な餌場となっています。

しかし、田んぼの開けた環境ではハヤブサやチョウゲンボウなどの天敵から見つかりやすく、鳥たちも呑気に食事を楽しむわけにはいかないようです。様々な鳥の戦略をのぞいてみましょう。全身が地味な色で複雑な模様のタシギは、身をひそめてじっとする「隠れ身の術」。そこにいると分かっていても、一

度目を離すと再び見つけるのは至難の業です(写真2)。ハクセキレイやハシボソガラスは、「モビング」が得意。これは、天敵や見慣れない動物を見つけると、追い払ったり注意を促したりするために、近くにいる鳥が集団で攻撃したり騒ぎ立てたりする行動です。複数の個体につきこく追いかけて回されると、さすがの猛禽類でもうんざりして退散することが多いのです(写真3)。しかし、すべての鳥たちがこのような恵まれた体や技を持つているわけではありません。そこで大切なのが、隠れ家の存在です。

田んぼの真ん中に丈の高いヨシが残された一画に、百羽を超えるスズメの群れが吸い込まれていきました(写真4)。キジのつがいや、絶滅危惧種カシラダカも出入りしています。観察を続けると、数羽のスズメがヨシ原から周りの畦に出てきて、しばらく地面で餌をついばん

人里に生きる鳥の暮らし
—多様性を支える冬の田んぼ—

コラム

房総丘陵の動植物(20)

度目を離すと再び見つけるのは至難の業です(写真2)。ハクセキレイやハシボソガラスは、「モビング」が得意。これは、天敵や見慣れない動物を見つけると、追い払ったり注意を促したりするために、近くにいる鳥が集団で攻撃したり騒ぎ立てたりする行動です。複数の個体につきこく追いかけて回されると、さすがの猛禽類でもうんざりして退散することが多いのです(写真3)。しかし、すべての鳥たちがこのような恵まれた体や技を持つているわけではありません。そこで大切なのが、隠れ家の存在です。

では、またヨシ原に戻ります。ヨシ原のすぐそばで餌を食べることで、天敵から襲われるリスクを避けているようです。ヨシ原が優れた環境なのは、隠れ家だけでなく餌場でもあることです。罌用にくちばしを使ってヨシの中から虫をほじくり出す様子も観察されました。

冬が深まると、田んぼや畦に伸びたヨシやスキが、いたるところで刈られたり焼かれたりします。刈り取り作業中のオギ群落では、カヤネズミの巣が見つかりました(写真5)。このようにして開けた環境は、猛禽類がネズミや小鳥を狩る餌場となります。人が管理すること、繰り返し餌場と隠れ家が生まれ出される冬の田んぼ。房総丘陵には、人の暮らしの中で変化する環境をうまく利用し、しっかりと暮らす鳥たちの姿があります。

(平田和彦)

特集

生きものに刻まれた房総丘陵の地史



陸上で暮らすトウキョウサンショウウオの成体 (尾崎輝雄 撮影)

トウキョウサンショウウオは房総丘陵のほかに、本県の下総台地、福島県、茨城県、栃木県、埼玉県から東京都にかけての丘陵部、そして東京湾を挟んで対岸の神奈川県三浦半島に生息しています。サンショウウオは長距離を移動したり海を渡ったりすることができないので、海や草原などで隔てられた生息地の間では血縁関係が時間とともに薄れていき、次第にそれぞれの生息地に独自の特徴が現れます。私たち人間でもごく近縁な血縁者は顔などがよく似ているのに対し、より遠縁の親戚ではあまり似なくなることがイメージするとわかりやすいかもしれません。

このように、過去の陸地などの形やつながりから現在見られる生きものの分布を説明したり、逆に生きものの血縁関係から過去の地理を推測したりする学問を系統地理学と言います。トウキョウサンショウウオは房総丘陵に何万といる生物種の中のたった一種にすぎません。たとえばオサムシ類のように飛べない昆虫など(図4)、房総丘陵と他の地域の個体群の関係性がわかっている生きものはたくさんいます。皆さんも房総丘陵から系統地理学、さらに生物学や地学の世界を覗き込み、時間旅行をしてみませんか？

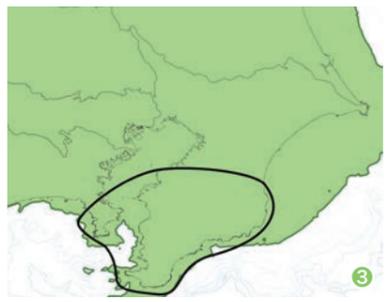


アワカズサオムシ (斉藤明子 撮影) 房総丘陵と三浦半島のつながりが分布に影響した可能性がある。

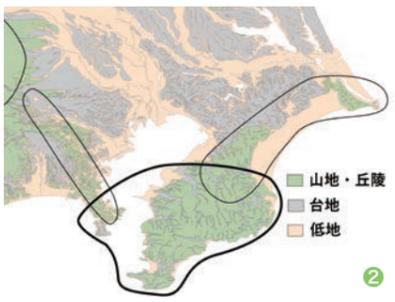
結果は驚くべきものでした。なんと房総丘陵のトウキョウサンショウウオは、茨城、埼玉、東京といった近隣県、さらにはすぐ北に位置する下総台地のトウキョウサンショウウオよりも、東京湾で隔てられた三浦半島のトウキョウサンショウウオと近い血縁関係を持つていることが明らかにされたのです(図2)。海を越えられないはずのサンショウウオが、なぜ海を越えたつながりを持つているのでしょうか？

その答えは房総丘陵と東京湾の形や大きさが、過去十数万年から数千年の間に、様々に変化してきたことにあるようです。地球が寒冷化した時代(氷期と言います)には、氷河などの膨大な氷が陸上に形成されたことで海水の量が減り、約二万年前の最終氷期には海面の高さが現在よりも百メートル以上低下しており、関東地方は今より広い陸地になっていたと考えられています(図3)。そのような時代には房総半島と三浦半島も陸続きで、海を渡ることができな

い生きものにとっても近い場所だったと言えます。また、最終氷期以前にも数万年から十万年単位で地球は何度も温暖化と寒冷化を繰り返してきましたから、サンショウウオにとつては房総丘陵と三浦半島がすぐ近所の時代と海の向こうの遠い土地である時代が代わる代わる繰り返されてきたこととなります。トウキョウサンショウウオは房総丘陵と三浦半島がほぼ陸続きの時代にこれらの地域で一つのグループを作っていたのだと考えられます。



約2万年前の千葉周辺の陸域 房総丘陵-三浦半島グループの分布域(黒い囲み)が一続きの陸地だったことがわかる。国土数値情報(行政区画)(国土交通省)とGEBCO等深線データより作成。



トウキョウサンショウウオの血縁グループの分布 一つの囲いがグループの境界を示している。分布が重なった部分では交雑が起きている。地図は国土数値情報(地形区分)(国土交通省)より作成。

(栗田隆気)